Kwansei Gakuin University

フォーラム

近現代ヨーロッパ史におけるアソシエーションとそのネットワーク

阿　河　雄二郎

アソシエーション（association）は一般に「結社」と訳されるが、平たくいえば「社交　(société)」や「つきあい（sociabilité)」をベースとした団体のことである。中近世のヨーロッパにおいて、国家と家族の間に介在する自律的な「中間団体（corps intermédiaire)」としてのアソシエーションは、ギルド（同職組合)、信心会、慈善団体など、公的な機関とは別に成立し、独自の目的・規約・基金を有し、成員間の絆を強化する役割を果たした。

とくに18世紀以降、アソシエーションの活動が顕著なイギリスでは、信仰、救貧など伝統的なもの以外に、政治や社会問題の解決、趣味・娯楽を目的とした団体が簇生し、公論の形成や情報空間の拡大に貢献している。19世紀の参政権、労働者の権利、女権などを求める運動は、こうしたアソシエーションの活動と不可分の関係にあるが、その際、公私生活の分離、余暇の有効利用、女性資源の活用などが契機となっている点が注目される。19世紀のアメリカで活発なコミュニティ運動や女性運動も、アングロ＝サクソン系の人々がもつ濃密な社交生活を背景としたものであろう。

海峡を隔てたフランスでも、古くから宗教的・職業的・民俗的なアソシエーションが展開していた。18世紀中葉には、イギリスの影響のもと、「クラブ」が登場している。フリーメーソンのような秘密結社も創立された。貴族的な「サロン」が男女混交の社交の場であるのに対し、ブルジョワ的な「クラブ」では女性が排除され、節制が求められた。もっとも、フランスでは、フランス革命期の団結禁止法（＝ル・シャプリエ法）に基づき公権力による監視体制が強まり、アソシエーションの自由な発展が阻害されたといわれる。団結禁止法が完全に解かれるのは1901年である。それでも、現実には、都市部のサロン、サークル、カフェ、ガンゲット、ミュチュエル（互助組合）をはじめ、農村部でも飲酒を目的としたシャンブレ、趣味的な音楽協会、消防団など多種多様なアソシエーションが設立され、やがて労働組合や農業の諸団体（生産者団体、農業協会）が結成される母胎ともなった。政治と宗教は禁物とされるアソシエーションにおいても、19世紀を通じて「政治化と世俗化」（M・アギュロンの指摘）は着実に進行していたのである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

19世紀末から20世紀初にかけて、アソシエーションは肥大化し、その一部は全国規模で組織され、公権力とも一定の関係を取り結ぶようになった。アソシエーションと公権力との活動の重なりも生じてくる。この点では、国民国家が標榜され、世界大戦に突入した時点が、自律的な結社として出発したアソシエーションの大きな転換期とみられる。しかし、諸個人の「アトム化」が進行している今日でも、ヨーロッパ諸地域でアソシエーションがなお健闘している状況をみるにつけ、アソシエーションという仕組や紐帯は、ヨーロッパ史を読み解くひとつの切口を提示していると思われる。貧困、医療、教育、環境、ジェンダーなどの問題に取り組むアソシエーションは、国境という枠を超え、まさにワールドワイドに広がっている。

こうした状況をふまえ、本シンポジウムでは、18世紀末から20世紀にかけてイギリスとフランスで成立したアソシエーションの動きを中心に、当該アソシエーションがどのように展開したか、どのような人々が参画したか、そのネットワークはどのようなものであったかを検討し、歴史的存在としてのアソシエーションとその研究の意義の一端を明らかにしたい。

NII-Electronic Library Service